●就任の言葉

新しい節目に向かって

坂田直三
（国際中学・高等学校長）

去る四月、同志社国際中・高等学校の四代目の校長に就任いたしました。身に余る重責と存じますが、学内各位のご指導・ご支援と教職員の皆様のご協力を得て職務を全ういたしたく考えております。

国際中・高等学校は、高等学校が一九八〇年に、中学校が一九八八年に産声をあげた学内で一番若い学校ですが、学内各位のご指導とご支援を得て、ようやく学校としての体裁を整え、未来への展望を語れる学校になりました。ここにあらためて学内の皆様に厚くお礼を申しあげます。

さて、国際高等学校は、この四月に開校一六周年目を迎えました。私は、この激動の時代にあっては一五年は一つの節目と考えておりますので、本校も次の一五年の節目に向かって新しい時代に入ったといえます。過ぎ去った一五年を振り返りますと、開校時は全く手探りのスタートでした。全ての教職員にとって帰国子女教育は未経験のものでしたので、日本語が理解できない生徒が居るとして、板書は英語と日本語を併記することとしましたし、また、教職員で英会話を習ったりしま

した。数多くの試行錯誤もありました。特に、現在の日本語科を中心とする指導体制が確立するまでは、日本語指導に右往左往したものです。ようやく生徒への指導と学校運営に落ち着きをもつことができましたのは、数年前からです。そして、二・三年前から私たちの教育に少しながらも自信をもつことができるようになり、まだまだ指摘されるべき不十分さをもちながらも、安定と成長の軌道に乗ることができたというのが開校後一五年、第一回目の節目を迎えた率直な思いであります。安定と成長の軌道に乗ることができたと申しましたが、それを可能にいたしました最大の理由は、本校卒業生受け入に当っての同志社大学、同志社女子大学の温かいご配慮と進学を認められた本校卒業生の大学での活躍にあると考えております。また本校卒業生は、大学卒業後就職いたしました企業におきましても高い評価を得ております。語学力が優れていること、自分の意見をしっかりともち、それをはっきりと表現できること、全ての事柄に積極的に関わり、リーダーとしてグループをまとめる能力をもっていること、色々な場への適応力があることなどが企業で評価を得る点であります。この評価されている点は、いずれも今後国際社会で活躍しようとする場合に必要とされる資質であります。私は、本校がもつ雰囲気の中でかかる資質が養われていることは、本校の教育が同志社の「国際主義教育」の理念の実践に一翼を担うところまで成長したと思っております。

さて、私たちは、来るべき次の一五年間、安定と成長の軌道をどのように伸ばし、発展させていくかという大きな課題を背負っております。同志社の教育理念であります「キリスト教主義教育」、「国際主義教育」を根幹に据えながら、どのように軌道を太くし、伸ばしていくのか、この四月から全教職員が英知を絞って検討に入りました。私は、週五日制への推移を見据えながら、本校の特色ある教育の完成、つまり、一人ひとりの生徒に自らが考え判断し行動できる能力もたせる教育、日本語教育、語学教育、国際理解教育、情報処理教育などの充実・強化を行いたいと思っております

し、また一人ひとりの生徒のもつ優れた点、すなわち才能を伸ばす教育を行うための制度づくり、教育方法の導入なども行いたいと思っております。これらの教育の充実・強化は帰国生徒教育の高度化を意味します。帰国生徒教育は、もはや帰国生徒のためのみの教育でなく、国内一般生徒のための教育でもあり、ひいては今後のわが国の教育の方向性を示す教育でもあります。この意味で、本校の教育は将来を身据えた教育であるといえます。そして、その教育を進めるために必要なことは、教育の内容（教育制度、教育方法、カリキュラム）の充実、施設・設備の充実、教職員の質的向上、財政面の強化の四本の柱です。この四本の柱のどれ一つを欠いても学校の健全な発展はありません。この四本の柱がしっかりと据え付けられてはじめて安定した学校経営を行うことができると考えております。歴史的に見ても全ての面で蓄積の少ない本校は、ここ数年の間に四本の柱の強化を計らねばなりません。もし、ここ数年の間に強化をすることができなけば次の一五年目の節目を同志社の健全な学校の一つとして迎えることはできないと考えます。

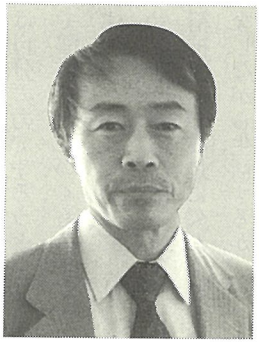
本校が学内で果たすべき役目は、同志社の「国際主義教育」の進捗と発展にあると考えています。海外での入学試験の実施、海外説明会への教員の派遣、「同志社海外・帰国子女教育センター」の設置、フィリップス・アカデミー、アンドーヴァーとの交流、インターネットの利用などは、ある面で国際化への将来の展望を示すもので、この活動をいかに多彩に、いかに厚く行うかが今後の課題であるといえます。国際化への活動を活発に行うことにより、どしどし世界へ発信していきたいと考えております。「関西から世界への発信」を本校の一つのモットとして、それを通して学内での役割を果たすことができれば非常に幸と考えております。

学内で一番若い学校である本校へ、学内各位の一層のご指導とご支援をお願い申しあげ就任のことばといたします。

●就任の言葉

「幼稚園園長に就任して」

小林 眞造
（幼稚園長）



このたび表題のようなタイトルで寄稿するようにとのご依頼を戴きましたので幼稚園に関連して私が考えております二、三の項目について述べさせて頂きます。

一、園児達を取り巻く環境

幼稚園で園児達の会話や動きを見ておりますと、子ども達はみんな無意識のうちにも、身体的な面でも、精神的な面でも、「何とか自分達の力で成長したい」という願いを持ちながら生きているんだなあということがありありと伺えます。子どもたちのこのような願いを叶えてやろうとする場合、園児達をどのような「環境」の中で生活させるか、ということが重要になります。環境は大きくは「自然環境」と「生活環境」とに分けられますが、「自然」は園児達の発育に欠かせないものです。太陽の光を一杯浴びながら夢中になって遊べる空間、きれいな空気と水は幼児の体の成長に関わる大切な要素ですし、それに緑豊かな木立や軟らかい土は子ども達の精神状態を落ち着かせるとともに、騒音や排気ガスを防ぐ役

割も果します。もう少し欲をいえば幼児が「自然」を十分に満契できるような環境、すなわち鳥や虫がいる林、小川のせせらぎ、思う存分暴れられる野原などが近くにあれば理想的といえます。

「生活環境」は自然環境以上に多岐に亘りますが、家族構成、家庭内の設備、備品類、例えばテレビ、ビデオ、おもちゃ、絵本など、子ども達がどのような人達や事物に囲まれて生活しているか、さらに旅行や見学などどのような見聞をしているかが子ども達の成長と密接に関係します。両親、兄弟、祖父母などの家旅の「生きざま」そのものが幼児を教育する効果を持ちますし、自分のことは自分の力でやろうとする意識、あるいは頑張って幼稚園に通う意欲などは家族とのつながりの中で醸成されていくものです。また家族で誕生日祝いをするとか、遊園地、海、山など子ども達が喜ぶ場所へ連れていくことによって彼らは感動することを覚えますし、物事に取組む意欲と自信を深めていきます。一方テレビやおもちゃ、絵本なども同じように知識の吸収をはじめ、言葉の習得や精神面への成長に欠かすことのできないものです。このように幼児達がどのような人間関係を織りなしながら生活するか、どのような事物に接しながら毎日を過すかは彼らの成長と深い関係があるといえます。

幼稚園という場所は、必ずしもこれらの自然環境、生活環境などの条件を十分に満たしているわけではありませんが、幼稚園には、教員である複数の大人がおり、同年輩の友達がおり、そして緑の木々や土の広場があり、遊具類や楽器、絵本があって、幼児達の成長に関わる物理的な条件はほぼ揃っているといえます。さらに、園内では満たし得ない条件を補足するために、遠足やキャンプなどの園外活動が行われています。ですから、幼稚園という環境は、幼児が健全な成長をするための場所として非常に重要な意味を持っているといえます。

二、幼稚園の役割

「学校」で児童、生徒、学生が受けるのは「教育」で、そこでは主としてさまざまな教科の知識が与えられるとともに、人格の形成に必要な訓練を受けています。一方幼稚園で園児達が受けるのは「保育」と呼ばれています。もちろん「幼児教育」という用語が使われてはいますが、これは幼児が家庭、幼稚園や保育園、さらにそれ以外の場所例えば旅行や見学地などで経験する生活全体を通して幼児が受ける総合的な訓練や指導を意味する言葉であると思われます。幼稚園での保育はその中味から考えて「保護」と「育成」を意味しているとみなせます。ですから幼稚園は知識を与えることを主な目的としている場所ではありません。また音楽や工作、絵の指導は保育の一環として必要ですが、歌が上手に歌えること、絵が巧く画けることあるいは運動が敏捷にできることなど技術的な面の上達を求める場所でもないのです。保育を通して幼稚園が園児達に期待するのは、子ども達なりの社会性、自立性を身に付けてくれることです。つまり園児達が自発的に行動するように指導するとともに、自分達の身の回りのものに対して積極的に好奇心を示すように見守っていくことが幼稚園の役割であると考えます。このような指導では「遊び」が非常に重要な役割を果すといえます。

遊びは園児達にとって自己表現の場であり、仲間達との意志交換の場であり、さらに体と体との接触の場でもあります。この遊びを通して園児達は互いにもまれながら成長していきます。ここで一つ大切なことは、学校では大部分の時間、黒板に向って教員の言葉を全員で一律に聞きますが、幼稚園での指導はこれとは全くパターンが異るということです。すなわち幼稚園では遊びや運動、創作活動の中で、園児個人個人の性格や能力を尊重しながら個別に導いていくことが重要になりま

す。そこでの指導は決して一律ではなく、個個の園児に適応したきめ細かい接し方がなされることになります。

三、同志社幼稚園での保育の視点

同志社幼稚園では基本的には先に述べましたような理念と考え方に基いた保育を目標にしておりますが、少し具体的にどのような保育を目指しているかを記します。

一、生活姿勢を創造的にする

「自由遊び」や「課題活動」例えば工作やゲーム、クッキングなど、園児達が自発的な行動と思考をし易い場を与え、人の模倣ではなく、常に創造的に行動するように導きます。

二、自立心を育くむ

「自分のことは自分で」、「自分達のことは自分達で」処理するという指導を通して子どもたちなりの自立性、社会性を身につけるように導くことも保育目標の一つです。

三、縦の交わりを大切にする

現在年長組一クラス、年中、年少組各二クラス制で保育を行っていますが、クラス単位の保育の外に、園児全員でのフォークダンスやゲーム、運動などを楽しみながら園児達同士の交わりの範囲をできるだけ広げ、彼ら同士の信頼感の増幅を目指します。

四、短期間でのクラス担任の交代

一年間を三学期に分けてその学期毎にクラス担任が代るシステムをとっています。これには園児達が違った先生の保育の特性に接し、バラエティーに豊んだ雰囲気を味わせるという意味があります。一方教員サイドとしても、全員が自分の担当クラスのみでなく、全園児を掌握しながら保育を

行うことができるという効果もあります。

五、保育の一つの特色

同志社はキリスト教の思想を立学の精神としている学園ですから、幼稚園でも毎週土曜日に礼拝を行い、旧約聖書の物語りの話をしております。この礼拝の積み重ねが人を愛し、人に愛される思いやりのある心の育成につながると思います。以上同志社幼稚園が保育の目標とするポイントについて記しました。子どもたちは大人とは全く異なった感覚で生きています。激しい喧嘩のように見えても、子ども同士にはそのような感覚はなく、次の瞬間手を取り合って仲良くしているというようなことが多々あります。同志社幼稚園では園児たちの世界を理解しながら彼らの心の働らきを捉え、人と自然を愛する心がこの同志社幼稚園時代に芽生えるような保育を目標に教員一同努力して参りたいと考えております。